

尾瀬ネットワーク通信

2004年11月20日 VOL7.No.4(21.1) NPO 尾瀬自然保護ネットワーク

2004年度の活動を終了して

活動に参加した皆さん、ごくるうさまでした

04年度の活動も9月25～26日の「尾瀬ヶ原野生シカ調査」をはじめ片品村の駐車場におけるアイドリングストップの呼びかけ、尾瀬ヶ原三叉における入山者指導（担当・坂本理事）、10月9～11日の会津バス添乗解説、御池駐車場におけるアイドリングストップの呼びかけ、尾瀬沼周辺および裏燧林道での入山指導（担当・佐藤理事）をもって無事終了しました。

また、夏から秋にかけては、ネットワーク発足以来または途中から活動項目に組み入れられた至仏山東面登山道調査（担当・永島理事）指導員養成講座（同）など続けてきた活動も、つつがなく終了することができたうえ、本年度から新たに観察会、研修会も加わりました。

1つは9月18日に行われた福島側の「只見川源流研修会」（担当・磯部理事）、もう1つは群馬側で9月24日に実施された「尾瀬高校自然環境科見学会」（担当・坂本理事）で、それぞれ有意義な催しとして参加者から高く評価されたようです。

本年度もこれら一連の継続活動ならびに新規活動を行うことができたのは、役員の方々と参加会員の皆さんの尾瀬に対する熱い思いと行動力があってのことです。感謝の意を表します。

課題がないでもありません。1つは、昨年に比べて初めて活動に参加した会員が何人かいたものの、依然、特定少数の参加者（役員中心）という構図は変わっていません。かのクーベルタン男爵の名言ではないが、ボランティアも「参加することに意義がある」のではないのでしょうか。05年度は「申込み多数につき抽選」とはいかないまでも、お世話になっている民宿を借り切るくらいの参加者があろう神仏に祈っています。

また、せっかくスタートした研修会・観察

会なので一般（非会員）にも参加を呼びかけて自然保護に対する教育啓発ができたと思っています。開かれたネットワークにしないと、NPOとしての資質が問われることとなります。05年度からは、テーマによってはこの点を意識した企画を期待しています。

最後になりましたが、04年度も（財）緑の地球防衛基金をはじめ（社）日本旅行業協会（JATA）、仙台コカ・コーラボトリング様より多大な助成金、賛助金を頂戴しました。活動をサポートしていただき、紙上より厚く御礼申し上げます。

（高橋 喬）

ごみ焼却問題で申入書提出

尾瀬を守る会構成6団体

ネットワークなど尾瀬の自然保護関連6団体で構成する「尾瀬を守る会」（中根一郎会長）は8月17日、東京都中央区新川の緑の地球防衛基金で代表者会議を開催し、見晴地区の複数の山小屋が汚物ごみなどを焼却炉で焼却していた問題を討議した。その結果、環境省国立公園課、同北関東地区自然保護事務所（日光事務所）、尾瀬保護財団、檜枝岐村、尾瀬山小屋組合に申入書の提出を決めた。

ネットワークからは、国立公園課に椎名が全国山林ネットワークの鈴木氏と、日光事務所には高橋が福島県自然保護協会の布施氏、尾瀬自然保護指導員福島県連絡協会の白田氏と同行、それぞれ申入書を提出した。

日光事務所では上原裕雄所長、小沢晴司次長、伊藤勇三公園保護科長が対応した。「早急な調査の実施と不祥事の再発防止を」という申し入れに対し、上原所長は「昨年3月、行政、関係団体等の代表者が集まって尾瀬の稜線内では、ごみを焼却しないよう申し合わせたばかり」と説明。9月中旬に再度集まって研修会を開催し、不祥事の再発を防ぐと回答した。

（高橋 喬）

秋の只見川源流研修会報告

未開のコースに行く

福島県側秋の研修会は9月18日(金)～20日(日)の日程で開催されました。

参加者7名、只見町に集合。遠くは神奈川、千葉、埼玉、東京、宮城と、どこから来ても「遙かな尾瀬」よりも遠かったと思います。

東京から上越新幹線で小出駅、そして只見線に乗り換えて数時間、トンネルばかりの只見線です。只見の橋本屋旅館ではご主人の目黒孫六さん(65才)が田子倉湖で釣り上げた40センチ級の大イワナがテーブル狭しと並ぶ。天然舞茸、そして熊汁に舌づつみ。目黒さんから9月の豪雨時の田子倉湖、白戸川での遭難事故の様子を事細かく説明を受ける。自然災害の怖さと山の天候を甘く見た登山者の判断ミス。悪天候時の判断の重要性を改めて認識する。目黒さんはテレビ局の取材人を船で現地に案内するなど地形にも詳しく、地元きっての山男でもあります。



只見川源流研修会に参加された皆さん

2日目、雨の田子倉湖を船で渡り大島ダムの下に着く。これより電源開発専用道路を歩く。大半が舗装で、管理用道路とあってよく整備されていました。いつしか雨も上がり、岩場に咲き競うダイモンジソウ等の秋の花々、又、サルナシ、ブナ、トチの実等を手に取り観察しながらの4時間半、途中豊富な沢からの冷たい水。喉を潤すには有り余る大河の一滴でした。

午後1時30分、日本最大の人造湖、奥只見ダムに到着。電力館にてスライド上映を見る。さらに館長の駒形正幸氏よりダムの概要、最大出力52万KWの地下発電所の仕組み等の説明。広大な流域面積を尾瀬に持つ只見川ゆえに存在するとの説明を受け、尾瀬口行きの船に乗る。船上から見る湖岸の山々、数百

年前からの雨、雪崩によって磨かれ人をも寄せ付けない光り輝く見事なスラブ(一枚岩)に見入っていました。紅葉には少し早かったものの、天候も回復し奥只見湖貸し切りの湖上遊覧でした。

尾瀬口には会津バスが我々7名の到着を待っていました。樹海ラインをバスに揺られ御池到着時には夕方5時を回っていました。

桧枝岐では「わたすげ荘」にてもてなしを受け、最終日には御池～沼山峠間のバス添乗解説を予定通り実施。3日間の研修を無事終了致しました。参加して頂いた会員の皆様に御礼申し上げます。

なお、この企画に対しましては電源開発㈱小出事業所、奥只見電力館、南会津森林管理署、及び只見町橋本旅館各位のご協力により実施できました。厚く御礼申し上げます。

参加者は磯部義孝、佐藤義信、武繁春、深山美子、横田有弘、初谷博、伊藤アケミの7名。

(福島県側理事 磯部 義孝)

尾瀬高校自然環境科見学会の報告

9月24日(金)14時より群馬県利根村の群馬県立尾瀬高等学校を訪問し、全国の高校で類を見ない自然環境科の施設を見学し、一昨年の総会で講演をお願いした松井孝夫先生にお話をうかがった。

まず、木造2階建ての自然環境棟内を見学。この学校の環境教育について説明していただいた。尾瀬をはじめ武尊山、日光白根山、吹割渓谷、片品川などの豊かな自然を背景に、人と自然の共生を考え、実行できる人間づくりを目指しているという。

そのため、1年次には「環境実践」で自然観察のノウハウを、2年次には「環境測定」で環境調査の方法を、そして3年次の「野外活動」では自然の中での主体的な実践活動に取り組んでいる。自然環境棟を見学中、山の格好をした生徒たちが、武尊山の実習から帰着したが、みんな一様に日焼けしてたくましく、頼もしく見えた。全員が「こんにちは」と大きな声で挨拶し、いまどきの高校生には失われてしまっている“何か”を感じた。

尾瀬については、1年次の「総合尾瀬」で自然科学的観点から尾瀬を学び、さらに他の地域の多様な自然を学ぶことによって、尾瀬への理解をさらに深めるように工夫されている。

3年次になると、生徒が自ら課題を設定して個別に調査・研究を進めている。なか

にはサンショウウオの行動を調べるため、なんとか発信機を取り付けられないか日夜苦心している生徒もいる。面白い(失礼)学校だ。



尾瀬高校自然環境棟。自然環境科の生徒たちは“純木造”のこの校舎で学んでいる。

校外(アウトドア)活動もユニークで、実践的だ。尾瀬実習(尾瀬ヶ原、尾瀬沼、至仏山、アヤマ平)はもちろん、大清水~三平峠間、玉原でのブナ植林作業、日光白根山、丸沼高原でのシラネアオイ保護・復元作業など世の中の役に立つ実践活動も行っている。しかも継続して実践できるよう3年生がシラネアオイの種子を採取し、1年生がこれを蒔いて育て、2年生が現地へ移植するというシステムだ。

このほか、野外ではキャンプ実習、山スキー、オリエンテーリング、さらには溪流つりとサバイバル実習めいた種目もある。今年の夏、シカ調査に参加した折に見晴まで足を延ばしたところ、やはりシカ調査に来ていた生徒さんたちがテントを張っていたが、どうやら実習の賜物だったようだ。

地元の中学生を対象とした自然観察会も活発に行っている。



松井先生(左から2人目)の案内で自然植物園を見学する会員たち。

学校の片品川沿いに自然植物園があり、9年目になる。ブナ、ミズナラなど90本の樹木を含めて300本の草本が植栽されている。ビオトープのような小さな池や池塘もあり、その周りには木道まで敷かれている。ただし、かなり傷んでいる。尾瀬で使い古した木道を譲ってもらったからだ。

ここにクリが3本あった。参加者たち(とくに女性)がまるで童心に帰ってクリ拾いに時間を忘れて夢中になっていた。学ぶことが多く、そして楽しい見学会だった。

参加者は佐藤信良、坂本敏子、椎名宏子、清水博之、長島睦世、深山美子、横田有弘、高橋喬の8名。

(高橋 喬)

尾瀬初入山の樹徳高校生 から感想文(つづき)

前号に続いて、田中志朗指導員が参加した樹徳高校(桐生市)生徒の今夏休み尾瀬初体験感想文を紹介する。(編集部)

尾瀬に行つての感想

吉田 正貴

鳩待峠から山の鼻までは今回で二度目でしたが、一度目よりもより多くの発見をすることができました。時季が少しちがったので他の種類の花も見ることができてよかったと思います。

ニッコウキスゲがはずれ年だったので残念でしたが、コバギボウシがあたり年だったので、またちがう景色を見ることができ、少し感動することができました。

ヤマトリカブトなどの危険な植物もあったのでやはりこのような場所にあるのかと思いました。

深夜には天の川や流星、北斗七星などが見られたのでとてもよい夜でした。夜の湿地帯は霧がかかっていて、そこから見た月と山がとても美しく感動しました。翌朝の日の出は天候が優れず、見ることができなく残念でしたが、深夜の景色も早朝の景色もとても風情がありました。

至仏に登るのは初めてだったので意外とたいへんな道のりでした。しかし、登りは予定時間よりも早く山頂に着くことができました。山頂で一瞬でしたが霧が晴れ、尾瀬ヶ原を見渡すことができてよかったです。下りは雨が降ってきてしまい、とても危険で何度もすべりそうになりました。それでも、たくさんの植物を見ることができ、よかったです。

尾瀬の環境がどんどん悪くなってきている

ので、さらに悪化すると楽しむことができなくなりそうです。だから僕達にもできるようなことがあるならそれをやっけていき、少しでも尾瀬の環境が戻ればいいなと思っています。

尾瀬に行つて

三澤 祐子

私が尾瀬というものを初めて知ったのは、小学校五年生のときでした。その知るきっかけとなったのが、国語の教科書に載っていた「まもる、みんなの尾瀬を」という小説でした。そこには、尾瀬の自然破壊が進んでゆく様子が鮮明と書かれている文がありました。大清水をブルドーザーで掘り崩し、森林を切り開いて自動車道を造ったりと、尾瀬の自然が消えてゆくのに私は心が痛みました。



鳩待峠にて

その尾瀬の自然を守ろうと立ちあがったのが平野長靖という人物でした。その当時、人々の「自然保護」という意識はまだまだ薄く、長靖さんはきっと、私の想像も及ばないほど苦労したのだと思います。彼はその後雪山で亡くなってしまふのですが、志半ばでこうなってしまったのには、きっと彼も無念だったのだと思います。

年月は過ぎ、私は高校生となり、部活で尾瀬に行つてきました。鳩待峠から山の鼻ビジターセンターまでの木道を歩いていると、たくさんの見たこともない草や花があり、私はすごく新鮮な気持ちでした。小鳥の鳴き声や川の流れる音など、目だけでなく耳でも楽しませてくれました。

ビジターセンターに着き休憩をとった後、次はその先にある湿原に行きました。そこには雄大な自然が広がっていました。至仏山が目の前にそびえたち、ほぼ360°山々に囲まれていて、雲がかかった山は本当にきれいでした。湿原では、太陽の光に染められた草花の緑が輝いていました。普段家のまわりで見る山々と、ここで見た山々とは、比べものにならないほど違いました。長靖さんが尾瀬

を守つた理由が少しわかつた気がしました。

夜の湿原では、ホタルが幻想的な光を放ちながら飛びかい、空を見上げると、ガラス玉のような星々が瞬いていました。写真でしか見るのでできなかった天の川も見られて本当に嬉しかったです。一番驚いたのは、月の光が太陽の光のように眩しかったことと、月の光で影ができたことです。いかに私の住んでいる地域が明るいかがよくわかりました。日の出も見ようと思ったのですが、あいにく曇ってしまったので見るのができなくて残念でした。

至仏山登山では、縁生に茂る森林の中を歩いていくと想像していましたが、実際は殆どの登山道が岩肌を露出していて驚きました。登っていくのにも一苦労で、ちょっとでも気を抜くと、ザックの重みで後ろに倒れそうになるので恐かったです。途中、雲が晴れた時は、尾瀬の景色がパノラマのように広がり雄大な自然を眺めることができ、嬉しかったです。

本当はもっとたくさんの尾瀬を見たかったけれど、短い期間で貴重な体験ができてよかったです。またこんな景色が見られたらいいなと思いました。尾瀬自然保護ネットワークの田中志朗さん、ありがとうございました。

尾 瀬

小澤 秀明

7月28日、29日を使い尾瀬に行きました。以前から、尾瀬や至仏山の状況(裸地、荒地)を資料や図鑑などを用いて確認していたつもりでした。しかし、実際にしてみると、尾瀬では木道付近に草ははえておらず、ましてや、人の足跡までありました。また、至仏山では、草木がなくなったところに岩肌が露出していて、自分が想像していた山とはだいぶ違いました。28日の夜には、尾瀬のビジターセンターという所で尾瀬や至仏山などに生息している動植物についての説明や木道付近の草木がなぜ生えなくなってしまったのか、などの話をしてくれました。この話を聞いて、人のなにげない行動が自然を壊しているのだなと実感しました。

また、動物については、オコジョを発見した人に事務室でオコジョ発見証明書を発行してくれるということを知りました。しかし、結局見つけることができず、残念でした。それほどまでも動物が減っているのだなと思いました。

たった二日間の尾瀬、至仏山への探索でしたが、普段、滅多に体験できない自然の動植物に触れることができ、とても勉強になりました。

(次号にも掲載予定)

キナバル山登頂報告

この小屋の宿泊定員は54人で、4軒合わせても収容力はおそらく200人程度と限りがあり、年間登山者数は2万人に制限されている。実に尾瀬の昨年の入山者数の20分の1で、自然保護団体のメンバーとしては、うらやましいと思った。

食事は山小屋としては上等で、スパゲティやソーセージ、焼そば、パン、ごはん、コーヒー、紅茶など洋風、中華風、マレー風の料理、それとパイナップルとメロンなどをバイキングスタイルでチョイスできる。

われわれが泊ったグンティン・ラガダン小屋の名前の由来は、初めてロウズ・ピークに登ったドゥスン族のGunting Lagadanから。名前はいいのだが、暖房がないので、コタ・キナバルで30あったのに、10ほどしかない。日本から持参したシュラフにくるまっても寒くて、ようやくうとうとしたと思ったら……、

2月21日

……翌朝は午前2時に添乗さんに起こされる。下のラバン・ラタ・レストハウスは、午前2時から朝食を提供しているが、下まで下るのも大変だし、「まだ食欲もない」と全員意見が一致し、それぞれ非常食を携えて午前3時にヘッドランプを点けて出発する。小屋の裏からいきなり長いはしごを登る。前途多難を覚悟。ただし、見上げると満天の星で、サザンクロス（南十字星）も手を伸ばせば届きそうなところで輝いていた。

30分ほども歩いた頃、真っ暗闇の中でも山容（山の形）が変わった事がわかる。完全に一枚岩のような大岩盤に入ったようだ。最初はロープにつかまって、カニの横這いのように水平に移動したあと、直登になる。ただし、浮き石もないし、表面がざらざらして滑りにくい花崗岩なので、傾斜が急でも問題なかった。それでもやはり酸欠気味なのか、やたらにあくびがでる。

さらに1時間ほど歩いて、最後の小屋サヤツサヤツ小屋（3996m）に着く。ここは最終チェックポイントで、レインジャースタッフ

が登山者の一人ひとりを照合する。ここは避難小屋も兼ねていて、簡易ベッドが8台ほどあり、高山病にかかった若い女性（台湾人？）が横になっており、連れの男性が心配そうにしていた。



白いロープはガスがかかったときなどにコースアウトしないため。

今回の登山で気が付いたのは、キナバル山には欧米の人々もいたが台湾からのツアー客の多いことだった。

この小屋を出て最初は緩い長い斜面を登るが、やがて太い白いロープが延々とつながっており、このロープ沿いに登っていく。このロープは登りにつかまるとはほとんどなく、むしろ下りの難所で役に立ったが、本来は雨期などでガスがかかったとき、コースアウトして遭難するのを防ぐのが目的。実際にはガイドの同行が義務づけられているので、コースを誤ることはないだろう。

管理事務所でIDパスと一緒に渡された日本語の注意書きには、慢性疾患のある人や体調の悪い人は登らないことといった注意事項のほかに、「もしコースアウトしたら、勝手に歩き回らずに、その場所にじっとしていること。」「必ずスタッフがあなたを助けに来ます」とあった。下山時間帯になってもサヤツサヤツ小屋を通過しない登山者があれば、何か異変が起こったとすぐわかるからだ。

また、ガスが出やすい日には、ホイッスルを貸し出しているようだ。それにひきかえ、入山口が複数あるからといって、わが尾瀬ではハイ

カーの入下山のチェックはゼロ。これでは毎年のように行方不明者が出るのも、むべなるかなと言えよう。せめて燧ヶ岳と至仏山くらい、登山カードを厳密にチェックするなどしてほしい。

ロウズ・ピークまであと500mといったあたりから、鬼の角のようなピークのあるキナバルサウス・ピークや、セントジョンズ・ピーク(4090m)が立ちはだかるように立っていた。



セント・ジョンズ・ピーク(4090m)

頂上まであと500m地点といったあたりからの展望はすばらしかった。雲海の向こうに山並みが連なり、晴れていればその向こうにフィリピンが見えるとか。気温は5、酸素濃度は平地の60%とあって、軽いめまいと頭痛に悩まされた。

悪戦苦闘の末、ついに東南アの最高峰に立った。頂上はおとな4人がやっと立てるほどのスペースしかない。山頂には2つの標識があり、1つはロウズ・ピークの標高を記してあり、もう1つは前述した初めてこの山に登ったグンデイン・ラガダンの記念碑である。

ガイドのソピーニ氏と固い握手ののち記念撮影。彼のサポートと一緒に登った人たちとの励まし合いがなかったら、途中でギブアップしていたかもしれない。

(次号へ続く)

(高橋 喬)

カンパのお知らせ

田中志朗さん 10,000円

有難うございました。お志しに添うよう、尾瀬自然保護活動に役立たせて頂きます

「尾瀬自然保護ネットワーク」

新指導員名簿

次の10名の方々が2004年指導員養成講座の室内・現地研修の全課程を修了され、新たに指導員の仲間入りされました。

尾瀬現地指導の力強い援軍として、今後の活躍が期待されます。

- 赤塚 耐三(東京都江戸川区)
- 伊藤 アケミ(東京都江戸川区)
- 池田 稔夫(千葉県松戸市)
- 大橋 清次(東京都江戸川区)
- 加藤 憲司(埼玉県伊奈町)
- 東雲 明(埼玉県朝霞市)
- 初谷 博(千葉県習志野市)
- 前田 悦子(千葉県千葉市)
- 宮城 裕二(神奈川県川崎市)
- 吉田 敏男(埼玉県寄居町)

なお東雲はシノノメ、初谷はハツヤ、宮城はミヤシロと呼びます。

自然保護ネットワークとは、既に解散した尾瀬の自然を守る会の自然保護指導員の有志が1997年3月に設立した「尾瀬の自然保護活動を実践」している民間のボランティア団体です。2003年9月4日にNPOとなり改称されました。

NPO 尾瀬自然保護ネットワーク
〒100-001
東京都千代田区永田町 2-17-5-203(株)SEC 内
電話 03-3851-0321/FAX 03-3581-2178
<http://homepage.mac.com/ozenet/>
理事長 高橋 喬
事務局長 椎名 宏子
編集担当 若松 真・島上 健